

1 研究の内容

(1) これまでの研究と成果

令和元年度から昨年度まで、本部会では「生活の探究からあみ直しへ」を研究テーマとしてきた。これは、研究主題「学びをあむ－新領域『てつがく創造活動』を中核とする教育課程の開発－」を受けて設定されたものである。「学びをあむ」とは、自分の思いを大切にして、様々な人・もの・こととかがわりながら自己を更新し、新たなものを創り出していくことを指す。このことから本部会では、子どもたちに家庭科の学習を通して自分自身の生活を見つめなおし、学習したことを生かして主体的に行動し、自分なりのめあてに向かって柔軟に修正を繰り返しながら、新たなよりよい生活を創造していける力を育みたいと考え、研究に取り組んできた。そして、この「主体的に行動し、めあてに向かって柔軟に修正を繰り返して創造する姿」を、生活を「あみ直す」姿と捉え、4年間の実践の中で具現化してきた。

① 家庭科で育みたいメタ認知スキル・社会情意的スキル

本部会の研究テーマにある「生活の探究」は、これまでの研究を通して、自分の生活を立ち止まって省察することが、その始まりであると分かった。授業では、自分にとっての当たり前を友だちと交流することで、“よさ”が固定化されることなく“よりよさ”の探究を導き、それが生活のあみ直しへとつながられることも分かってきた。そして、家庭科の学習を生活に生かすには、身につけた技や、得た気づきを自分の生活と意識的に関連させて、家族や相手のことを考えながら行動する必要がある。これまでの研究で、このような家庭科の学習過程そのものが、家庭科における「メタ認知スキル」を育むことが分かった。

また、家庭科で取り組む実習の場面では、粘り強さや没頭すること、協力する態度等が求められ、これは、「社会情意的スキル」の育成に繋げられる。このような「メタ認知スキル」と「社会情意的スキル」が、学習場面における主体的な学びを支えることを、表1「主体的な学びを支える力」として整理する。

表1 主体的な学びを支える力（メタ認知スキル，社会情意的スキル）

	メタ認知スキル	社会情意的スキル
個による 学びの場面	自分や自分の生活を改めて 見つめ直し、課題を見出す	粘り強くかかわり、最後まで 取り組む
↑↓	学習したことをどのように 生活に生かすか考え、実行す る	友だちとの違いを受けと め、よりよさを追究し、自分 なりに工夫する
協働的な 学びの場面	相手の反応を予想しながら 活動する	没頭する・楽しむ
		みんなのために今、自分が できることを考えて、実行する

② 持続可能な社会の実現に向けた取り組み

本部会では、特にコロナ禍以降、積極的に持続可能な開発目標（SDGs）を題材に取り上げている。それは、持続可能な社会の実現への意識やその価値判断のもととなる感性を育むには、トピック的に取り上げるだけでなく、年間を通してくり返し意識づけを行いながらカリキュラムを構成していくことが有効であるためである。令和2年度にはSDGs新聞づくり、3年度は食品ロス削減をめざすこども戦略会議、そして昨年度は、フードドライブにも参加している。附属高校生との交流を通して、フェアトレードチョコレートについて学ぶ機会も得られた。このような継続的な取り組みから、持続可能な社会の実現について考えることが、学校や教科の風土として根付き始めている。このことは大きな成果と捉えられ、社会にもはたらきかける附属学校園全体の取り組みへと発展させる基盤とすることができるまでになっている。

(2) 今年度の研究

① 研究テーマと研究の重点

私たちの生活は、コロナ禍の数年間で大きな変化を余儀なくされた。それは、人と距離をとる暮らし方を経験することだった。このことは、時に人と人との間にある物理的な距離だけでなく、心理的な距離さえも遠ざけてしまうことがあったと感じられる。人々が、家族や地域、社会の一員として互いにかかわり合い、共に支え合いながら生きることを学ぶ「家庭科」としては、様々な実習や活動にも制限が加えられる耐え難い年月だった。しかし今年度は、社会全体として様々な場面に制限の緩和が見られる。そこで、本部会では、これまでの研究内容や成果を引き継ぎつつ、制限緩和に合わせてその活動に広がりをもたせながら取り組んでいくこととする。

今年度の研究では、次の2点を大切にしたい。1点目は、「人とのかかわり」である。私たちは、コロナ禍にあって失いかけたからこそ、人とかかわる価値を再認識した。そして、厳しい条件下においてもなお、日々の生活の中で必ずしも対面しなくても、人とかかわり、ぬくもりを感じられる新たな方法を模索してきたし、同時に、時と場所を同じくするからこそ得られる安心感や一体感、連鎖するエネルギー、伝播する感情等を再確認した。しかし、今、家庭科を学び始めたばかりの子どもたちは、その経験が十分ではないと考えられる。そのため本部会では、人とかかわりながら生活し、人々の思いに触れ、その過程で自己を見つめ、更新する姿を目指す。

2点目は、「実験的な取り組み」である。これは、生活を科学的な見方・考え方で捉える力を育むだけでなく、暮らしの中で意図や根拠をもって選択できるようになってほしいと考えるからである。私たちの生活様式は、2000年頃から“スローライフ”の概念が生まれる等、生産性や効率性ばかりに重きを置かない暮らし方に注目が集まるようになった。さらに、このコロナ禍で、ものづくりに興ずることや、料理や製作等の手作りに挑戦する動きが、時間を有意義に使う方法やコミュニケーションの手段として、予期せず広がった。かつて、時間に追われて生活していた人々が、手間暇かける充実感や豊かさに気づき、時間の使い方を問い直し始めたと言えるだろう。その結果、自分の暮らしを見直し、暮らしの中に選択肢があることを知り、自ら考え判断し、能動的に生活することに目覚めた人が少なくないのではないだろうか。このような時代背景から、Well-being (ウェルビーイング) という考え方も、各分野で浸透するまでになった。そこで本部会では、家庭科における実習や実験の中で、どのように仕上げたいかを子ども自身が考え、意図や根拠をもって決める姿を尊重したいと考える。実験的な取り組みにおいて、予想や比較をしたり、実感を伴って理解を深めたりする経験を積み、その価値観や感性を問い直していきたいと考える。

以上のような考えから本部会では、人とのかかわりの中で生活を見つめ、価値観を問い直していくことを「生活の探究」と定義し、その探究を通して磨かれた感性をもとに、主体的に生活することが「暮らしを豊かにすること」と捉えることとする。そして、開発研究の最終年度として、生活を探究しあみ直す行為のその先に、子どもたち自身にも、暮らしを豊かにするよさを感じたり考えたりしてほしいと願い、部会テーマを設定する。

① 年間計画 (令和5年度 5年生) [記号：♡人とのかかわり, ◇実験的な取り組み]

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
家庭科オリエンテーション	調理オリエンテーション ①お茶をいれる◇	ゆでる調理 ①ほうれん草のおひたし◇ ②ゆでいも◇ ③ゆで野菜スープ♡	裁縫(手縫い) ①おたまじゃくし ②きのこのマスケット	夏休みチャレンジ	裁縫(手縫い) ②きのこのマスケット ③針さしづくり	持続可能な社会 SDGs ♡ おいしいご飯を炊こう ①ピーカー炊飯◇ ②文化鍋→おにぎり♡ アクション		整理整頓で快適に ①整理整頓チャレンジ♡ ②MY整理整頓メニュー♡	みそ汁づくり ①基本のみそ汁 ②こだわりのみそ汁◇	食品の組み合わせ ①栄養素とその働き ②食事の献立♡ SDGs♡	裁縫(ミシン) ①ミシンの使い方 ②あづま袋

2 授業実践からみる子どもの姿

(1) 実験的な取り組みを目指した授業実践 「調理実習オリエンテーション ～ ゆでる調理」

① 題材のねらいと概要

調理実習のオリエンテーションとして、家庭科室の使い方を確認しながら、「お茶をいれること」に取り組んだ。お茶の種類は、実施時期が新茶の時期と重なることもあり、新茶と新茶ではないお茶を用意し、さらに玄米茶とほうじ茶も選べるようにした。お茶のいれ方については、事前に調べ学習をして、基本的なことを確認してから実習に取り組んだ。お湯の温度や蒸らす時間、扱う茶葉の種類などはグループごとに決めることにした。

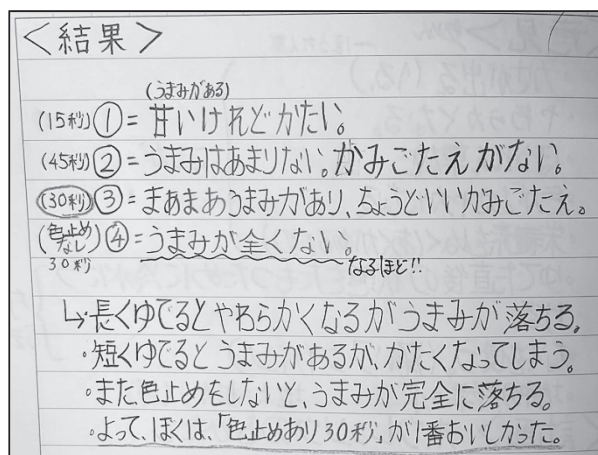
ゆでる調理では、まず、「ほうれん草のおひたし」に取り組んだ。基本的な調理の手順は共通とし、ゆでる時間や水にとること（色どめ）の有無は各グループで計画して実行することにした。「ゆでいも」では、完全に火が通る途中の様子も観察できるようにした。「ゆで野菜スープ」では、扱う野菜や加工品を選べるようにし、グループごとに組み合わせを決めた。そして、試食をしてもらう教員をグループで決めて、相手意識をもって取り組むことができるようにした。

② 子どもの姿と教師のみとり

「お茶をいれること」では、茶葉の種類による味の違いだけでなく、温度が低い場合は、高い場合に比べて甘く感じることに気づいたり、お湯を注いでから飲むまでの時間の違いからも、味や色の違いを感じたりする様子が見られた。「ほうれん草のおひたし」では、ゆでる時間が短いと固く仕上がりが、長ければやわらかくなることを感じていた。さらに、「長くゆでると、うまみが減る」と表現する子もいて、少しの違いも感じとろうとしていた。グループや全体で感想を伝え合うと、ゆで時間を何秒にするかは好みに分かれている様子だった。この時、調理には必ずしも正解は1つではないことを伝え、今後も自分が求める仕上がりを追究していくことを大切にしてほしいことを伝えた。

このような子どもの姿は、「メタ認知スキル」を発揮し、自ら課題を見出し、よりよく仕上げる工夫を考えたり、比較して気づいたことを生活に生かそうとしたりしていると感じられた。

そして、「ゆで野菜スープ」ではここまでのゆでる調理で得た知識や経験を生かして、選んだ野菜の火通りを確かめたり、食べてもらう先生の好みをインタビューしたりして、取り組むことができたと感じられる。



〔写真1〕ほうれん草のおひたしの調理で比較したことをまとめた子どものノート

(2) 持続可能な社会の実現に向けた授業実践

「お茶小ONGs^{オーエヌジーズ}チャレンジ（おにぎりアクション参加） 5年生」

「フードドライブ 5・6年生」

① 題材のねらいと概要

5年生でご飯（炊飯）の学習をする時期と、SDGsに関する学習をする時期を重ね、私たちにもできる持続可能な社会に向けた取り組みの1つとして「おにぎりアクション」に参加した。SDGsとの繋がりを印象づけるため、ONGs（オニギリ）という題材名を掲げることにした。おにぎりアクションの取り組みは、活動の輪をさらに広げようと、小学生から発信し、本学の附属学校園である幼稚園、中学校、高等学校、大学（お茶大SDGs推進研究所）へ一

〔写真2〕6年生高校生との交流の様子



緒に参加するよう呼びかけることを、家庭科係を中心に企画し、学年にも働きかけながら取り組むことにした。具体的には、家庭科係がポスターやチラシ、説明動画を作成し、各附属学校園へ渡すなどすることと、おにぎりの写真を見合うことをして、人とのかかわりや活動の広がりを実感できるようにした。

炊飯の調理実習は、1回目はビーカーを使って、ガラスの中が見えるようにした。2回目は文化鍋を使用し、その時に炊いたご飯をおにぎりにすることとした。文化鍋では中の様子が見えないが、1回目で泡がたくさん出ていたことを思い出しながら、五感を使って炊飯に必要な火加減ができることを目指して取り組んだ。

また、同じ時期に、6年生を中心として「フードドライブ」を行った。これは昨年度までも本学と附属学校園全体で参加している取り組みで、6年生は5年生の時にも経験している。そのため、経験者である6年生が、附属高校の1年生に、活動の趣旨や回収した食品の行方、回収できる食品のルールや注意事項などを説明するという交流授業を行った。6年生は高校生に向けたプレゼンテーションを作る途中で、SDGs推進研究所の大学生との交流を図ることもできた。5年生は、6年生の実行委員の活動に賛同する形で、自宅から食品を持ち寄って参加することにした。

② 子どもの姿と教師のみとり

「おにぎりアクション」では、家庭科係から意欲的な呼びかけが行われた。それぞれの校種による発達段階の違いを考えながら、伝える方法を工夫し、資料を作成する姿を見ることができた。そのように準備した小学生のお知らせを、園庭にいた幼稚園生が集まって聞いてくれたので、小学生と幼稚園生が互いの気持ちに呼応する響きを感じることができた。そして、小学生が興味や関心をもったものが中高生にも広がり、共有する楽しさを味わうことができたと感じている。このことは、「社会情意的スキル」が育み発揮された場面と言えるだろう。

また、炊飯の調理については、授業で行う2回の調理実習より早く、夏の林間学校での野外炊事と、そのための練習会を学校の校庭で実施している。それらを含めると、今年度は計4回の炊飯を経験したことになる。本部会では、前述のように子どもが意図や根拠をもって選択できる姿を目指して「実験的な取り組み」を取り入れるようにしている。炊飯についても、はじめに教師が方法の全てを伝えるのではなく、失敗も経験しながら目の前の素材と向き合って、思考しながら取り組むよう支援してきた。このことは、「メタ認知スキル」を育み、発揮することができたと感じている。

3 今後に向けて

今年度は、これまでの本部会の研究の積み重ねを生かして、持続可能な社会の実現に向けた取り組みを継続しつつ、「人とのかかわり」と「実験的な取り組み」を大切に、その過程で育み発揮される「メタ認知スキル」と「社会情意的スキル」をみとめることを研究の柱としてきた。研究を通して、その経験を積み重ねることで、それまでよりも見通しが明らかになったり、かかわりが深くなったりしながら、「メタ認知スキル」と「社会情意的スキル」が育み発揮されることを感じた。

ただ、カリキュラム・オーバーロードと言われる今、家庭科でも扱いたい、取り組みたい内容や活動は多岐にわたっている。持続可能な社会の実現に向けた取り組みは、それだけが切り取られた題材のように子どもに伝えられるのではなく、学習にも生活にも馴染んでいくことが重要だろう。そのためには、家庭科でのカリキュラムマネジメントを工夫し、題材を絡めながら扱うことを続けていきたい。

(築地)



〔写真3〕5年生
幼稚園との交流の様子